

オンラインシンポジウム「公害資料館が果たす役割と未来」

公害資料の収集と解釈における論点

2022年1月8日（土）

中央大学文学部 清水 善仁

はじめに

■本論文が取り扱った内容

- ・ 公害資料とは：範囲と存在意義
- ・ 収集をめぐる論点
- ・ 解釈をめぐる論点

公害資料とは：範囲と存在意義

■公害資料の範囲

- 作成主体別の分類：行政機関、企業、弁護士、研究者…
- 形態別の分類：行政文書、個人のメモ・日記類、出版物、
学術論文、写真・映像、物品類…
 - * 「語り」という資料の存在（口述資料）
- 内容に基づく分類：
公害に対する企業等の意識の検証にかかる記録、
公害防止技術の開発、その推移を知る記録…

公害資料とは：範囲と存在意義

■公害資料の存在意義

- ・ 公害にかかわる過去の事象を解釈・復元するための手掛かり
公害経験（記憶）の継承、諸研究の素材として
- ・ 「語り」と「資料」（特に文書資料）
相互補完の関係性
コミュニケーションという観点

収集をめぐる論点

■多様な主体からの資料収集

- ・ 公害資料館が所蔵する資料の現状
被害者・被害者団体の資料が中心
⇔ 公害発生企業、行政機関の資料は？

■「研究者アーカイブズ」の意義

- ・ 研究者による網羅的な資料収集とその利用可能性
宇井純、飯島伸子、舩橋晴俊、宮本憲一

収集をめぐる論点

■戦前の公害資料収集の必要性

- ・近代日本公害史の特徴

 - 戦後：高度成長にともなう経済・社会の発展

 - 戦前：明治維新後の富国強兵と近代工業化の推進

 - ⇒戦前における公害史研究の重要性（小田康徳）

- ・戦前公害史資料の所在把握（発掘）と研究

解釈をめぐる論点——パブリック・ヒストリーを参考に

■資料解釈の手続や対象をめぐる

- 資料批判／コンテクスト理解
- 資料というモノの存在自体から為しうる解釈

■資料と記憶の関係をめぐって

- 「記憶は、たえず変化し、想起と忘却を繰り返す」(ピエール・ノラ)
- 「資料」と「語り」の異同、「集合的記憶」の形成

むすびにかえて①

■公害資料をめぐる多様な課題の存在

- ・ 公開体制の整備：個人情報保護
- ・ 専門職（アーキビスト・学芸員等）の配置

むすびにかえて②

■公害資料館ネットワークでの取り組み

- ・資料分科会（研究会）

フォーラムでの分科会の他に、随時、研究会を実施
主要なテーマは、【整理】【公開】【利活用】

*各地の資料館等での実践事例の紹介が中心

- ・「資料はある。でもどこから手を付けてよいか分からない…」
⇒そうした問いへの回答／ヒントとなる場として